

要旨

岩澤 龍彦

本論文ではハルネス・マイヤーの1926年から1930年まで、すなわち、スイス・バーゼルとドイツ・デッサウのバウハウスでの建築活動を明らかにすると同時に、その時、その場所での建築界はどうなっており、そこでのマイヤーの位置づけを試み、マイヤーによる言述や実践の矛盾とも思えるねじれた事象を示した。

はじめに、ミースのフォルマリズム批判を発端として、ドイツ建築におけるフォルマリズムを明らかにした。ミースの批判はドゥースブルフとリーツラーを対象として、目的化された「形」、結果としての形に拘泥する姿勢を批判した。ドゥースブルフの場合には「芸術表出」や「芸術コンポジション」、「様式」が主題化されており、そのことが批判され、他方、リーツラーは、ムテジウスがそうであったように、よい「形」を通じて洗練された「ドイツ文化」を対外的に示す術策によって、フォルマリズム的態度が裏付けられている。こうした事情はグロピウスでも同様で、よい「形」への関心は損なわれることはなかった。しかし、ミースのフォルマリズム批判は、本質主義的で、属人的な傾向を有し、芸術と技術を厳然と分ける意味で二元論的で、建築芸術の自律性を護ったフォルマリズムの共通項をも示唆していた。

このフォルマリズムに対置されるのが、ミース、『ABC』の建築家であった。ミースは時代の要求から出発して、建築におけるプロセスとしての建設、材料生産の工業化を訴えることで芸術と技術の二元論は消失し、技術、エンジニア、構造が支配的となった。時代状況に根拠を置く点でミースの建築論は他律的であり、リアリズムと称せよう。『ABC』のメンバーとして取り上げたのはスタムとシュミットであるが、かれらもリアリズムであった。なぜならば、スタムも時代の要求から出発し、建設の工業化とそれに伴う建設の経済化、システムとしての「構造」に関心を示し、シュミットもまた「必要性」から出発し、建設の工業化とその経済的効果、その効用の及ぶ範囲を考慮し、技術の産物としての「構造」に着目していたからである。シュミットはそれにとどまらず、建設の算術化、科学化への道をも示した。このように『ABC』のメンバーの建築論もまた状況に裏付けられ、「技術」としての建築、建設を首肯した点でリアリズムである。

マイヤーもまたリアリズムであった。「新しい世界」でプロセスに注目し、建設は技術的なプロセスと定義された。しかしマイヤーの特異な点は「機能」についての独自の見解にあ

った。「目的は機能である」とマイヤーが述べるときの「機能」とは建築プログラムを正常に作動させることであり、この目的遂行の最良の手段として、算術とダイアグラムが用いられた。この意味でマイヤーは建築の「科学化」を試みていた。そのプロセスである「建設」の「科学化」に取り組み、建築プログラム、時代が提示する現実的な条件、現実の環境条件に根拠を置く、他律的な態度を取る点でマイヤーはリアリズムであった。

しかし、これまでで示したフォルマリズムとリアリズムの二項からなる図式はリアリズムにとっては絶対的であったとしても、フォルマリズムにとってはそうではなかった。

フォルマリズム批判という方策は、マイヤー・バウハウスでもカライを中心に展開され、旧バウハウスにおける芸術と技術の二元論を調停する試みの反動的な副産物としての自由芸術、バウハウスにおける絵画、思考様式としてのバウハウス様式が批判され、これもまたフォルマリズム批判であった。それに対してカライは、所与の現実的、特殊具体的な要求によって裏付けられた、「生の物質的組織化」としての建築を提示した。これは技術偏重のリアリズムへの反省と生活への回帰に裏付けられていた。徹底した現実志向と、技術的な事象にとどまらない建築像を提示した点でこのカライの建築論はオルタナティブ・リアリズムである。

バウハウスの校長職を務めていたマイヤーも、それに連動して、自身の建築論を変化させ、「生」への志向を強め、さらには、その建物をとりまく環境的諸条件の総体としての「地勢」が与された。この建築理解を具現化したのが連邦学校案で、労働組合的教育を建築プログラムとするその校舎の住居棟のフロアプラン、構造においては、組合的な集団生活を涵養すべく、集団生活の組織構造が直接的に反映された。また、ベルナウの森という「地勢」、が活用され、心身ともに組織的な教育が受けられる校舎が構想された。このようにしてマイヤーはオルタナティブ・リアリズムを実践した。

しかし、マイヤーの示した（オルタナティブ・）リアリズムの建築、マイヤーの政治的態度をめぐってはねじれともいえるべき現象が起きていた。第一に、連邦学校案は組織化する構造物の発明に成功しすぎてしまっていたために、ナチスの学校へと姿を変えることができた点である。そして、第二に、バウハウスの「政治化」についてのマイヤーのアリバイの真偽である。国連コンベ案と連邦学校案はソ連人に全面的にはなくとも評価されていた。そして、モスクワでの展覧会において、マイヤー・バウハウスを「赤いバウハウス」として示すことができた。しかし、いずれにおいてもマイヤーはそのイデオロギーの欠如が指摘されていた。

ソ連におけるマイヤー受容において生じたこのねじれの原因は、独ソ建築界におけるフ

ホルマリズム批判を中心にして示される二つの三項関係のズレに求めることができる。ソ連建築界においても、芸術と技術の二元論を抱えるアスノヴァ、それを批判するオサとヴォプラがあり、後者はリアリズム的態度をとった。オサは特定の「目標」遂行のための「社会的コンデンサー」の発明に努めることで、一元化に努めたが、それはヴォプラにとっては技術フェティシズムでしかなかった。それに対してヴォプラは一元化装置としての「目標」を「五ヵ年計画」へと更新し、視覚的知覚作用を顧慮することで「芸術」を復権させた。このように「形」を目的化し、「芸術」と「技術」の二元論を保持する態度を「ホルマリズム」として批判する「リアリズム」が生起し、その「リアリズム」を技術偏重として批判する「オルタナティブ・リアリズム」が生起することで、独ソ建築界のそれぞれで類似した三項関係が生じた。この二つの三項関係の各位相は、「科学化」や「芸術」、とりわけ、「イデオロギー」の差異を動力として、ソ連建築界におけるその三項関係はドイツ建築界におけるそれに対して、ズレを生じさせた。

マイヤーはヴォプラとの差分を、その心理的組織を「芸術」と名付け、「芸術の契機」を取り戻し、「スターリン化」された言語を用いてイデオロギーを強めることで、ソヴィエト・オルタナティブ・リアリズムに同化することができたかもしれない。しかし、そうした方策はこの円環が成り立つ限りでしかない。1932年方針転換がなされたソ連建築界においては別の原理が作用していたはずである。ソ連建築界の構図を改めて示し、マイヤーのソ連での建築活動を相対化する必要がある。これが今後の課題である。